



なにげに怒る

このところ若い人が好んで使うことばに「なにげに」というのがある。「なにげに聞いてみたら？」とか、「なにげに教えてあげる」とか言っている。

どうも「なにげに」というのは、「さりげなく」とか、「何となく」という意味らしい。つまり「なにげに」は、「なにげなく」というのを更にサラリと言ったつもりなのである。確かにそれを口にするとき、彼らはとても奥ゆかしいデリケートな表情を見せるので、私は聞いていて決して悪い気がしない。

しかし、その一方で、こうも考えるのである。もともと「何気なく」というのは何気、つまり殊更なようすをせずに、という意味なのだから、その否定の「なく」を取ってしまったら、「わざとらしく」とか「ことさら」ということになってしまふのではないだろうか。

理屈っぽいことを言うようだが、ことばには論理や法則があるから、ただの気分だけでちよっと飾りを変えてもいいというものではない。アクセサリーとは違うのである。

とはいえ長い間には、ことばもどんどん意味内容や使われ方Ⅱ文法が変わっていくもので、たとえば平安時代には「ぞっとするような」という意味だった「すごし」という語彙が、昭和になると感心したり、びっくりするときの気持ちを表現するようになった。

おもしろいのは、それとまったく同じことがフランス語



なにげに怒る

にも起こっていることだ。古来「恐ろしい」「ぞっとする」という意味だった「フォルミダブル」という単語が、二十世紀になると「すばらしい」とか「すてき」という意味になり、やがて若い人たちはさらに略して「フォルミー！」と感嘆の声を上げるようになった。

それで思い出したのだが、三十年ほど前、ある会食でフランス人の中年夫婦の向かいに座ったとき、奥さんが自分の皿の半分近くを「多すぎるわ」と呟きながら夫の皿に移してしまった。すると彼がしかめっ面で「君ってフォルミダブル」と言ったのである。いやがっていたのか喜んでいたのか、今もって疑問だ。

ことばは確かに理詰めのものだが、ときには崩してみると、ちょっとオシャレな感じになったりする。分かってはいても、わざとユーモアで誤用をしてみる。すると密閉した空間に新鮮な空気が流れ込んできたような清々しい気分になる。

そういうことは重々わかっているのだが、それでもムカッ腹を立てることがしばしばだ。二、三年前のことだが、テレビでアナウンサーが「悩ましい問題」と言うのを聞いたときは、ナニッ？ と心の中で角を出した。私に言わせれば、「悩ましい」というのは「官能が刺激される（むしろ魅力的な）」もののことを言うのであって、「悩ましい脚線美」みたいに使うのだと思っていた。ところが最近



なにげに怒る

「どうしたらいいか判断に苦しむ」ことを言うらしいのである。たとえば時局の問題などで、政治家が「それはなかなか悩ましい状況ですが…」などとやっているのを聞くと、なんだか妙な気分になってしまう。

しかし、その「悩ましき」もどうも短時日に市民権を得たようで、近頃では私もあまり気にならなくなった。いい加減なものである。

時はどんどん過ぎていき、ものごともしだいに容れられなくなっていく。ことばも例外ではないが、それにしても道理や筋道はあるのではないかと、「なにげに」文句を言ったりしている。

初出 || 北國新聞「北風抄」二〇〇五年一月一八日
ホームページ掲載 || 二〇二二年八月二三日